

台湾の族群と歴史の複雑性

台湾の族群と歴史

前回(7月号)は、台湾社会の多様性と複雑性の原因は「族群(エスニック・グループ)」と「歴史の複雑性」であることに言及したが、具体的にこの二つの要因がどのように台湾社会で作用しているかについて、とくにその「日本観」に注目して、詳しく分析を試みたい。

台湾社会の特徴を表すキーワードとしてしばしば指摘される「族群(エスニック・グループ)」という概念は、民族に似ているが、厳密に学術用語として民族と呼ぶものではない。ここでは一応、文化的差異によって凝集された集団意識に基づき、歴史経験と社会的境遇によって形成された社会集団と定義しておく。この族群が四つに分類されることからしばしば「四大族群」と呼ばれ、台湾社会においておおむねこのような説明が受け入れられている。

一つ目の族群である「原住民族」と呼ばれる人々は台湾で最初に居住し始めたと考えられているが、この人々は文字を持たなかったため、その開始時期や遷移の詳しい状況は明らかでない。この先住者である「原住民族」は、現在台湾の中央政府が認めている民族だけでも16族に分かれている。言語はオーストロネシア語族に属しているが、それぞれの言語は通じず、社会構造なども大きく異なり、多種多様である。先住者としての社会的境遇や言語の類似性、粟を主食にした焼畑や狩猟生活など生業の共通点から、一つの「族群」として捉えられている。

この「原住民族」が暮らす台湾へ、17世紀から18世紀にかけて中国大陸の広東、福建から大量の人々が移り住んでくることとなる。台湾西部の開拓を進め、稲作の農地を拡大し、原住民と抗争や交渉を繰り返し、その勢力範囲を広げていった。彼らは使用言語、出身地やその習俗の違いから、中国語の方言である閩南語(台湾では「台湾語」と呼ばれることが多い)を話す「和佬人」と客家語を話す「客家人」の二つの族群に分類される。この二つの族群はともに漢族であるが、お互いに異なる「族群」意識が形成、強化されることとなった。これら三つの族群が200年ほど交流や抗争を繰り返しながら、台湾社会の基礎を形成していくこととなった。

この三つの族群が暮らす台湾に、植民者として日本が出現した。1895年に日清戦争の勝利によって日本の新しい領土となった台湾を統治下におき、植民地となった台湾へ新しい統治者として日本本土から渡って人々が加わることで、それまでの族群関係に影響を与えることとなる。しかしこの当時「内地人」と呼ばれた人々とその子孫は、第2次世界大戦の敗戦により、すべて日本へ引き揚げて姿を消すこととなった。それに代わって、新しい統治者として中国大陸から渡ってきたのが、中国国民党(以下、国民党)による国民政府である。中国大陸における国共内戦もあり、この国民党とともに渡ってきた人々は「外省人」と称される族群に分類される。彼らの出身地は中国全土に及び方言や文化も異なっているが、台湾へ渡ってきた時期や台湾での社会的立場(統治構造において優位な地位の者が多い)から、一つの族群として捉えられることとなった。

台湾の日本観

ここまで紹介してきた四つの族群は、それぞれの人口に占める割合や(圧倒的多数を占める「和佬人」と少数者であるその他の族群)、歴史経験に影響を受けながら族群意識が形成されることとなった。例えば、前者の三つの族群は50年にわたる日本による統治を経験し、国語としての日本語や日本人としての自己認識、道徳倫理などの教育を受けていることから、それに対する反応や評価の差異はあるにせよ、歴史経験の共通点がある。「和佬人」と「客家人」を合わせて「本省人」と総称される)。それに対して第2次世界大戦後に台湾へ渡ってきた「外省人」にとっての日本は、日中戦争を戦った敵国であることから、前者の三つの族群とは大きく異なる文脈による「日本観」を持っている。

前者の三つの族群の日本観について、重要なことは日本統治とその後の国民党による統治を比較する視点を持っているということである。日本による統治も初期にはさまざまな抗日運動や武装蜂起とそれに対する武力制圧があったものの、統治期間が長くなるにつれ、教育制度や社会インフラ整備が進むことで社会が安定し、生活水準も向上していった。これに対して国民党による統治は、1947年に勃発した本省人と外省人の対立を決定的にする二・二八事件及びその後38年間にわたって続けられた戒厳令による政治的抑圧、また統治者としての優位的立場を悪用した不正や腐敗など厳しい社会状況が続いた。そのため、日本の統治を国民党のそれより良かったと主張する人々も多い。

ただ、「客家人」は「和佬人」に対して少数者であるため、「和佬人」の台頭を牽制する意図や、中国大陸にある出身地(「原郷」と呼ばれる)意識に根差した強い中国主義意識を持つという共通点がある「外省人」や国民党に対して、親和的態度を取る傾向も指摘されている。これらの族群と比較して、圧倒的少数者である「原住民族」は、日本、国民党、民進党へと統治者の変化に翻弄されながらも、その実利的、現実的側面を重視したやや冷めた眼差しで、それぞれの統治者を比較しながら、自らの先住者としての立場を考慮した族群意識が近年形成されてきているように筆者は感じている。また、これまで言及してきた族群意識は世代を重ねることで希薄化してきていることも事実で、それぞれの言語を使用しない若者世代が増加することで、その傾向に拍車をかけている。

しかし全般的に見れば、日本による戦前の植民地統治、この日本統治の残滓を一扫しようと進めた戦後の統治者の国民政府による「脱日本化」、そして1980年代後半以降の民主化など急激な変化を生じさせた「歴史の複雑性」を経ることで、族群意識の形成や強化が促され、これが台湾の日本観にとって大きな要因となってきた。このことは、次回から検討する台湾における天理教伝道史の重要な社会的背景となっている。

[参考文献]

黄智慧 2009「台湾における日本観の交錯—族群と歴史の複雑性の視角から—」『日本民俗学』259:57-81。